

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520474

研究課題名（和文）

宮崎県の方言動態および方言使用と話者心理に関する研究

研究課題名（英文）

Studies on the Dynamic Aspects of Miyazaki Dialect and on the Dialect Speakers' Psychology

研究代表者

早野 慎吾 (HAYANO SHINGO)

宮崎大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：90381053

研究成果の概要（和文）：

宮崎県の宮崎市(日向南部方言)、延岡市(日向北部方言)、都城市(薩隅方言)をフィールドに多人数調査および文法現象に関する詳細調査をおこなった。その結果から方言動態の現況を記述し、現在宮崎県で起きている方言変化のメカニズムを分析した。さらに話者のパーソナリティ(志向性)が方言使用とどのように関係しているかを分析するためのデータベースを作成した。

研究成果の概要（英文）：

We carried out an investigation involving many participants concerning the basic elements of dialect in Miyazaki city, Nobeoka city, and Miyakonojo city. In addition, we carried out a detailed investigation of the grammar phenomena in these cities. We described the present situation and analyzed the mechanism of language change in Miyazaki Dialect. We created a database to analyze relations between dialect use and dialect speakers' personality.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語学

キーワード：方言

1. 研究開始当初の背景

宮崎県の方言研究は、先学の貴重な研究はあるものの、他県と比べると研究報告は非常に少ない。それでも地域差に関するものは、九州方言学会(1967)『九州方言の基礎的研究』、国立国語研究所編(1966-1974)『日本言語地図』、国立国語研究所編(1989-2006)『方言文法全国地図』により概観できる。地域差に対して、言語動態に関する報告はほとんどない。加藤正信(2003)『宮崎県方言における地域差・世代差』で、

中学生とその保護者を対象とした30項目の調査結果が報告されているが、通信調査という性質と項目数の少なさから、十分な結果が得られたとは言えない。宮崎県方言に関しては、地域差・世代差の基礎的項目に関する調査結果が必要である。

2. 研究の目的

そのような状況で、早野を代表とする研究グループは、宮崎県方言の基礎的項目における地域差調査を2005年か

ら2011年にかけて行った。その地域差調査の結果と合わせて、宮崎県方言の現況と言語動態を記述することが本研究の第一目的である。

宮崎県方言は、まず日向方言と諸県方言に区画でき、日向方言は日向南部方言と日向北部方言に区画できる。各方言域の中心地である宮崎市(日向南部方言)、延岡市(日向北部方言)、都城市(諸県方言)で多人数調査を行うことで、方言動態の把握を目指す。

本研究で行う多人数調査は、概略を知るためのもので、詳細を分析することはできない。そこで、文法における重要項目(活用・可能表現・アスペクト)を、多人数調査から選定した数名の話者に対して行い、さらに詳細な方言記述を行う。

話者のパーソナリティと方言使用の関係分析のためのデータベース作成が本研究の第二目的である。多人数調査において、話者のパーソナリティと方言イメージに関する調査も行う。若年層においては、伝統方言形、新方言形、ネオ方言形が混在して使用されている。それらの方言形は話者のパーソナリティと関係して使用されていると考えられ、それを実証するための調査である。

3. 研究の方法

2005年～2011年に行った地域差調査は、宮崎県全域で、より地域差が確認できるような項目を選定した。多人数調査は、地域差調査と同一項目を用いている。これは地域差と同じ項目での言語動態の把握を目指した。

地域差調査は60才以上の話者145名(うち50名が世代差調査と共通)、世代差調査は宮崎市100名、延岡市98名、都城市116名に対して行っている。文法詳細調査は宮崎市16名、延岡市18名、都城市3名である。

この調査結果からデータベースを作成し、そこから地域差、世代差等に関する図や表を作成する。その表や図から宮崎県方言の現況および動態を記述する。パーソナリティと方言使用に関して、多変量解析を用いて分析するためのデータベースを作成する。

4. 研究成果

(1)宮崎県方言の地域差、世代差および詳細調査に関するデータを収集した。項目は音声・アクセント・文法・語彙合わせて約300項目に及ぶ。

調査結果すべての表・図が完成するには数年後になるが、本研究で得られたデータは、今後の宮崎県方言に関する基礎的なデータとして活用できるものと考えられる。

多人数調査の数項目を使用して、論文を1編執筆し、口頭発表を4回行っている。1項目のデータでも、145地点、409名を対象としており、信頼性が高い、価値のあるものである。

(2)ここでは論文にまとめた「団子」に関する項目について報告する。

宮崎県方言では団子のことをダゴと表現する。ダゴは音韻的には、ダンゴのン(撥音)が脱落したものであるが、共通語の団子とは意味範疇が異なる。

串団子や月見団子のような、小さく丸めたものでなく、まんじゅう(蒸し饅頭)やぼた餅、ちまき、蒸しパンもダゴに含まれる。それらは一般家庭で作られているが、宮崎県の伝統方言では、一般家庭で作られる菓子類を総称してダゴという。

しかし、共通語だけでなく、商品名としてマンジュウ(饅頭)やヤキ(焼き)などの名称が導入されたことにより、現在の宮崎県方言における菓子類の表現は非常に複雑化している。

(3)「だんご(団子)」に関しては、3都市ともに、ダゴからダンゴ(共通語)へと変化してきていることがわかる(図1～図3)。ダンゴはダゴの丁寧な語形と意識している話者が多い。

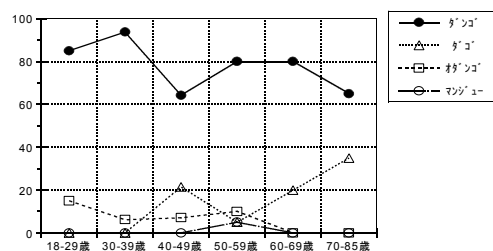


図1 「団子」宮崎市

3都市で宮崎市の共通語化がもっとも進行しているが、全県的に文化的中心地から共通語化してきている状況が、図4の言語地図からも確認できる。

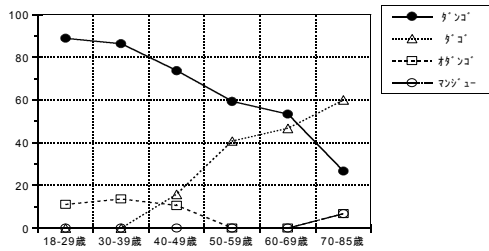


図2 「団子」延岡市

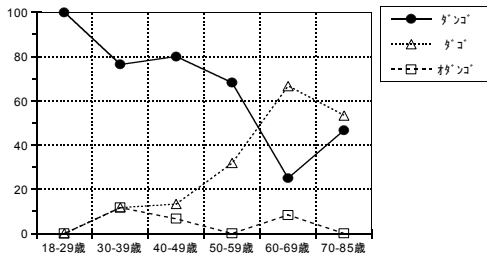


図3 「団子」都城市

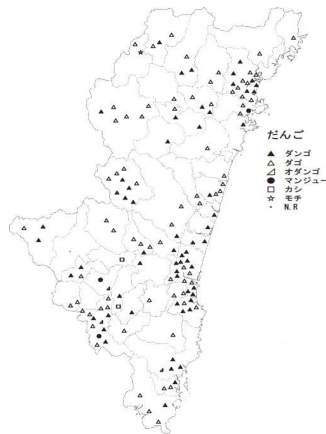


図4 「団子」言語地図

(4)「まんじゅう(蒸し饅頭)」はダゴ・ダンゴからマンジューに変化してきている(図5~図7)。図からは判断できないが、その変化は単なる共通語化ではない。詳細に調査してみると、語形は同じでも、世代により意味する範疇が異なっていることがわかる。活躍層・高年層ではマンジューをダゴの下位分類と認識している話者が多い。

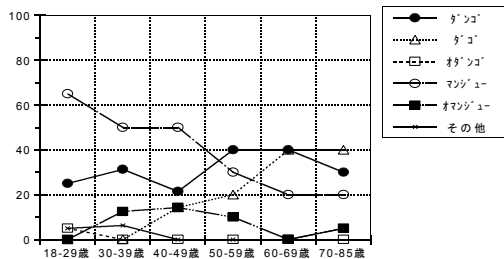


図5 「饅頭」宮崎市

高年層では、ダゴは菓子類一般、ダンゴはダゴを丁寧にした表現、マンジューは店で売っている商品(特に高級感がある)と認識している話者が多い。若年層ではダンゴとマンジューを別物と判断している話者が多いが、それでも蒸し饅頭や蒸しパンなどをダンゴと表現できる話者も多い。

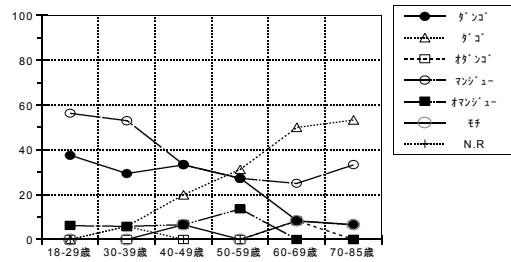


図6 「饅頭」延岡市

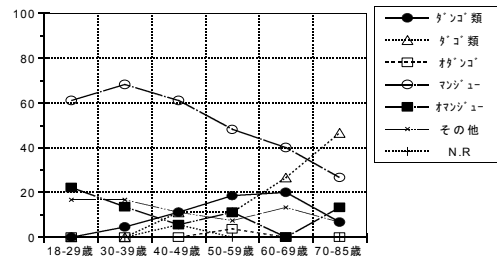


図7 「饅頭」都城市

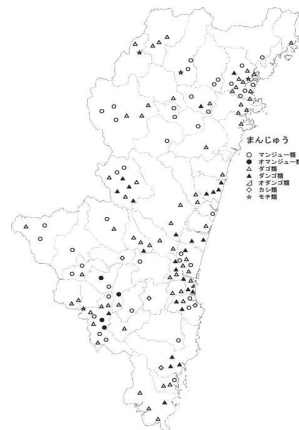


図8 「団子」言語地図

宮崎市・延岡市ではダゴ→ダンゴ→マンジューと変化してきているが、若年層でもダンゴと表現している話者が比較的多い。それに対して都城市では、ダンゴはほとんど使用されず、ダゴからマンジューに変化してきている。日向方言と諸県方言とで変化の違いを観察できる。

(5)詳細調査を宮崎市およびその周辺地域の話者に対して44項目について行った(高年層11名、若年層8名)。その結果

から、世代別のダゴ・ダンゴ・マンジュ
ュー・ヤキの意味範疇は次のようにま
とめられる。

伝統方言ではヤキはなく、単純にダ
ゴ(菓子類一般)コダンゴ(高級感のある
もの)コマンジュー(店で買うもの)とな
る。高年層は基本的にダゴコダンゴコ
マンジューコヤキとなるが、マンジュー
にはダゴに属さないもの、ヤキには
マンジューに属さないものが出てくる。
若年層では、ダンゴは家庭で作るもの、
ダゴはダンゴの古い表現、マンジュー
は店で買うもので中に餡が入っている
もの、ヤキは型や鉄板で焼くものとそ
れぞれ別物と認識されているが、共通
している部分もある。

世代差・地域差調査から菓子類の表
現形が変化してきていることを確認で
きた。また、語形は同じであっても、
共通語と認識が異なっており、さらに
世代によっても認識が異なっている状
況が観察できた。

「ダゴ」に関する意味分析は、本調査
の一部を使用したものである。以下の
「主な発表論文等」に記載してあるが、
本調査を使用して「同意要求表現」「ア
スペクト」についても、既に口頭発表
を行っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研
究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 早野慎吾、宮田好恵(2011)「宮崎県
方言における「ダゴ(団子)」」『*Ars
Linguistica*』Vol.18,pp.141-151 日本中
部言語学会、査読有り

〔学会発表〕(計4件)

- ① 早野慎吾、宮田好恵、2011.10.21「宮
崎県方言における「ダゴ(団子)」」『日
本方言研究会第93回研究発表会発表
原稿集』pp.29-38、日本方言研究会
第93回研究発表会、高知大学
- ② 早野慎吾、村上敬一、岡田祥平、宮
田好恵、山本友美、森山大洋、2011.
10.23、「宮崎県方言の同意要求表現」、
『日本語2011年度秋季大会予稿集』
pp.155-162、日本語学会2011年度秋
季大会、高知大学
- ③ 早野慎吾、山本友美、久保蘭愛、2011.
12.17、「宮崎方言のアスペクトにつ
いて」第57回日本中部言語学会例会、
静岡県立大学
- ④ 早野慎吾、山本友美、宮田好恵、

2012.1.7「宮崎県方言におけるアス
ペクト」第33回九州方言研究会例会、
熊本大学くすのき会館

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

早野 慎吾 (HAYANO SHINGO)
宮崎大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：90381053

(2)研究分担者

村上 敬一 (MURAKAMI KEIICHI)
神戸樟蔭女子大学院大学・文学部・
准教授
研究者番号：10305401

(3)連携研究者

真田 信治 (SANADA SHINJI)
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：00099912